



## 湿原の植物誌 北海道のフィールドから

富士田裕子著

東京大学出版会 2017年5月15日発行

A5版 242頁 ISBN978-4-13-060250-1 定価本体 4,400円 + 税

湿原の不思議な魅力を紹介し、今まで邪魔者扱いされてきた湿原の保護・保全を考える端緒となれば幸いであると、筆者は執筆した動機を書いている。本書の構成は、第1章湿原への招待、第2章湿原の自然誌、第3章湿原の植物、第4章失われつつある湿原、第5章よみがえれ湿原となっている。

第1章では、湿原の定義を説明しているが、筆者自身、なんて分かりにくいのだろうと書いている。本書では、「湿原」とは泥炭地上に成立する高層湿原（ミズゴケ）、中間湿原（ヌマガヤ）、低層湿原（ヨシ）に加え、泥炭が発達していない鉱物質の土でも湿った条件のために湿性植物群落が成立しているところや湿地林についても湿原の一種として取り上げている。

第2章では、湿原の形成や種類について説明している。気温から判定すると湿原は7月の平均気温が20℃以下の必要がある。北海道には全国の86%以上の湿原が存在しており、面積が1ha以上の湿原は179ヶ所、55,076haと見られている。そして、このすべての湿原について、所在地、面積、植生タイプ、保護制度の指定状況の一覧表が掲載されている。

低地湿原（釧路湿原、サロベツ湿原など）の形成は海進と海退などの影響を受け、6,000年前頃から始まった湿原が多いようである。一方、火山活動に由来する溶岩台地上に発達した山地湿原（雨竜沼湿原、浮島湿原など）は世界的にも珍しく、形成年代はまちまちであるが、晩氷期以降で15,000年よりも古い湿原はないという。湿原の形成についての教科書的な説明は、先ず湖があり、水生植物の遺体が湖を埋めていき、周辺部から湿原が出来て最後には湖の中央部に高層湿原が出現するという遷移過程であるが、筆者によると我が国にはこのような湿原は存在しない。

第3章では、筆者が長期にわたって研究の対象としてきたミズバショウ、ムセンスゲ、チョウジソウ、ハンノキの4種を取り上げている。ミズバショウは花が咲くときに注目を浴びるが、その後どうなっているのか知らない人がほとんどだろう。書評子は、ミズバショウは場所により随分大きさが異なるものだという印象を持って

いたが、本書によれば、観察する時期の違いのようだ。4月の開花期には小さいけれど、6月初めになると1mを超す葉が展開するという。ハンノキ、ハルニレ、ヤチダモは湿地林を構成する主要樹種であり、ハンノキは最も過湿な条件でも生育する。ハンノキも湿原調査では身近に見かける木であるが、喬木と思っている人から低木の印象を持っている人まで、樹高のイメージが異なりそうである。筆者は土壌水分条件等から高木型、根上がり萌芽型、萌芽低木型、萌芽矮性型に分類している。土壌物理研究者は土壌水分の定量化が得意であるが、植物の成長は土壌環境の積分値と考えることができることから、ハンノキのように、樹高や形状の違いから土壌水分条件の違いを定量化できる可能性がある。植物学や生態学研究者と共同研究では新たな展開が期待できそうである。

第4章では、1928年の最も古い特殊土壌調査では泥炭地面積は約20万haであったが、2016年には5.5万haと90年の間に約7割が失われていること、最大の要因は田んぼへの転換であると指摘している。そして、低地に形成される高層湿原の南限であった静狩湿原（長万部町）が失われてしまった理由や、かつては5万haをこえた最大の湿原で今はその面影がほとんどない石狩泥炭地、そして、壊滅的な攪乱、破壊を免れ湿原の保全・再生に取り組んでいる最大面積を有する釧路湿原を紹介している。

第5章では、荒廃してしまった生態系を元に戻そうという取り組みを紹介している。筆者は行政の行う自然再生事業に疑問を呈しながらも、批判するだけでなく、行政と一緒に考えて検証し、よりよい方法を模索することも実践してきた。植生復元に際しては、人間がお手伝いすることで、出来るだけ手を加えず自然に任せるのがよい。管理が行き過ぎると、公園や花壇を作るのと同じになってしまうと述べている。植生復元の取り組みにおいては、まず植生遷移と立地と植物群落の関係を考慮して、できる限り詳細な現状把握調査を行う、ついで今後の動態予測と小規模実験、さらにモニタリング調査に進むとともに、結果の検証を行うことを強調している。また、湿原の保全においては生物多様性（遺伝子、種、生態系レベル）の評価も大切であり、湿原ごとのデータベースに基づいて保全優先湿地を決めることや継続的なデータ

ベースの構築と更新が必要であることも指摘している。具体的に保全対策が取られた例として美唄湿原とサロベツ湿原を紹介しているが、サロベツ湿原の成功例は農家の湿原に対する意識の変化が大きいようである。そして今後は、行政・研究者・住民の連携協力が必要であることを指摘して本書は終わっている。

全体を読み終えての感想は、本書に別の表題を付ける

とすると、「一湿原生態学徒の研究遍歴」になるだろう。研究で得られた科学的知見に加え、筆者自身の湿原への取り組みで感じたことも書いているからである。話題は北海道の湿原に限られていたが、湿原保全の考え方や手法は全国に展開できるはずだ。

長谷川周一

(北海道大学名誉教授)